

R A E I B K O E

「いかに伝えるか」考えを巡らすのが
真のグローバルコミュニケーションです

受験で立ちふさがった
英語の壁

奥村 よろしくお願ひします。本日は、阿部さんの受験生時代を中心にこれまでを振り返っていただきたいと思ひます。世界を舞台に活躍されている阿部さんがどのように勉強されてきたのか、お話をうかがうのをとても楽しみに

建設コンサルタント
というお仕事

世界各国のインフラ整備に貢献するため、初期の調査から計画、設計、施工監理、維持管理、プロジェクトマネジメント、事業運営などの総合的なサービスを提供するのが主な業務です。日本が行っている政府開発援助（ODA）では、海外のさまざまな大規模建設プロジェクトに日本の建設コンサルタントが参加しています。

Profile

山口県出身。山口大学工学部工学科卒業。神戸大学大学院工学研究科修士課程修了。株式会社鴻池組に就職後、留学先のノルウェー工科大学で修士号取得。株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバルへの転職を経て、同社のインド現地法人取締役社長に就任。2014年には、山口大学大学院で博士号も取得しています。



SPECIAL INTERVIEW
あのとき私も受験生だった

#16
土木エンジニア
阿部 玲子さん

阿部玲子さんは、海外でさまざまなインフラ開発のコンサルタントを行う土木エンジニアです。英語で苦勞した受験生時代、父親を仰天させた工学部への入学、英語と格闘しながら働いた会社員時代などを中心に、奥村直生 Y-SAPIX 東大館館長がお話をうかがいました。



にして参りました。
阿部 私も、久しぶりに当時のことを思い出してみたいと思います。
奥村 さっそくですが、現在はどのようなお仕事に携わっていらっしゃいますか。
阿部 インド西部のアーメダバードという都市のメトロ建設プロジェクトと、インド初の新幹線導入プロジェクトに対してコンサルティングサービスを実施しております。
奥村 国家規模のプロジェクトを、二つも実施されているんですね。そもそも、お子さんの頃から今のように海外で活躍したいというご希望はあったのですか。
阿部 いいえ。当時は予想すらしていませんでした。
奥村 意外ですね。どのようなお子さんだったのでしょうか。
阿部 出身は山口県下松市ですが、父の仕事の都合で、小1から家族で大阪府枚方市へ引越しました。ですから、高校までの出身校は大阪府の枚方

市立五常小学校、枚方市立第四中学校、大阪府立枚方高校です。男子生徒の友だちが多く活発な方だったと思います。が、宝塚歌劇団に憧れたこともあるごく普通の女子生徒でした。
奥村 大学受験を控えていた当時は、どのような受験生だったのですか。
阿部 数学と物理などの理科系科目は得意で、英語が苦手でした。
奥村 得意・不得意の理由は、それぞれ何だったのでしょうか。
阿部 数学と物理は、公式とそれに基づく基本的な考え方を理解すれば、その応用で大抵の問題は解ける科目だという理由で得意でした。それに対して、英語は単語に熟語、文法などたくさん覚えることがあります。私としては勉強の効率が悪くて「大嫌いな科目」といつてもいいぐらいでした。同様の理由で、古典と社会科学の科目も苦手でした。その苦手意識が災いしてか、一浪時の共通一次試験でも英語の成績が振るわず、足を引張られました。そこで、当時2次試験では英語が課されなかった山口大学工学部建設工学科を選び、合格したのです。
奥村 英語にずいぶん苦しめたのですか。
阿部 当時は私自身、英語が不可欠だと感じておりませんでした。その意識のもち方が苦勞の原因だったのでしょう。つまり、学ぶ理由が見いだせなかったのです。

父を仰天させた
工学部への入学

奥村 工学部を志望した最も大きな理由は何ですか。
阿部 幼少期の思い出が大きいですね。父親に連れられて関門海峡を見に行った際、「これをつくったのは土木エンジニアという専門家だよ」といわれました。「こんな専門家だよ」というのだからという強烈な印象が、強く残ったのだと思います。しかし、実際に工学部に入学してみると予想外の事態に遭遇しました。
奥村 入学後に、ですか。
阿部 はい。建設工学科は、それまで女子学生が在籍したことのない学科だったのです。建設工学科の棟には女子トイレがありませんでした。結局、棟の脇に工事現場用の簡易トイレを私用に用意してもらったのです。
奥村 まさかトイレがないとは、予想できませんね。入学後は順調だったのでしょうか。
阿部 そうでもありませんでした。母は私が工学部に入学したことを知っていたのですが、父はそのことを実は知らなかったのです。私の母が教員ということもあり、私も教育学部に入学して、同じ道を進むものと期待していたのです。



藤田修平氏撮影



藤田修平氏撮影

奥村 お父様にはどういいうきさつで発覚したのですか。
阿部 山口大学は、工学部と医学部を除く学部では教養課程1年間と専門課程を山口市の吉田キャンパスで過ごしますが、工学部は2年次以降の専門課程になると宇部市の常盤キャンパスで学びます。そのため下宿を移ることになり、父に引越し費用の相談をした際です。教育学部なら吉田キャンパスで卒業まで。工学部はずなにおかしい、と父は気づいたのです。結局、父は驚きながらも私の選択を受け入れてくれました。
奥村 大学生時代には、どのような思い出がありますか。
阿部 周囲は男子学生ばかりでしたが、学友には恵まれたと思います。今でも同窓会を開き、当時のことや現在のことを語り合える仲間です。
奥村 同窓生のみなさんは、阿部さんのご活躍についてどのように反応されていますか。
阿部 私が大学時代も英語が苦手だったことをみんな知っていますから、海外で仕事をしていることがいまだに信じられないようですね。

意地を通して貫いたゼネコンへの就職

奥村 その後、神戸大学大学院工学研究科修士課程でトンネル工学を修めら

校に通い、夜はさらに会社に戻り終電間際まで仕事です。こうした生活を1年間送りました。そして30代のご努力が報われ、2年間留学させていただきました。その間、ヨーロッパ最北端の「ノースケイプ海底トンネル工事」で研修を受ける機会を得ることができました。
奥村 本当にご苦労なことで、キャリアを積み上げてこれたのですね。
阿部 ゼネコンへの就職を父に反対されても意地を通したのだから、今さら泣き言もいえないという気持ちが強かったと思います。
奥村 留学後は、どのようなステップを歩まれたのですか。
阿部 台湾新幹線のトンネル掘削工事に携わらせていただきました。
奥村 お子さんの頃に感じた「大きなものををつくる土木エンジニア」に、ついにご自身がなれた瞬間ですね。
阿部 そうです。かつて就職で反対した父が私の働きに納得してくれたのも、この頃だったと思います。その後、ゼネコンから建設コンサルタント会社に転職して現在に至っています。

専門の幅を広げてプロジェクトマネージャーへ

奥村 建設コンサルタント会社への転職後は、どのような歩みをたどられたのですか。
阿部 私がインドでの業務に就いた際、別の現場で大きな事故が立て続けに発生し、人命が失われました。それを受けて、日本のエンジニアとして、「何かできることはないか」と考えた先に見えたのが、安全管理というテーマです。トンネル工学から安全管理へと専門の幅も広がりました。
奥村 現在は、プロジェクトマネージャーを担当されているということですが、具体的にどのようなお仕事をなさっているのですか。
阿部 例えば地下鉄をつくる場合、最初に路線と駅の土地選定、確保および利益計算と経済効果の調査を行います。次に実務に携わる業者選定のための入札を行い、実際の工事が始まれば

れ、就職というステップをたどられていますが、就職活動にまつわるエピソードについてお聞かせください。
阿部 父と就職の件で衝突しました。父はどうか、私が公務員の建築系技術職に就くと期待していたようですね。しかし、私がゼネコンに就職しようと考えていることを知り、かなり驚いていました。「父にゼネコンの仕事は動まない」とこの時は父も引かず、大げんかへと発展してしまいました。しかし私も譲らずに、意地を押し通したのです。
奥村 就職活動そのものは、順調だったのですか。
阿部 女子学生ということで苦労しました。当時はバブル景気*の波に乗って、工学部卒への求人はとても好調でした。しかし、女子学生ということで敬遠されたようです。
奥村 どういう理由で女子学生を敬遠



施工管理を行います。工事終了後は、地下鉄の維持・管理という作業もありです。日本では鉄道会社などの組織が自前ですべて行いますが、インドの方たちはそのノウハウはまだ十分ありません。ですから、すべて私たちがコンサルタンチームが引き受けて、最終的に現地のスタッフが自力で運営できるようにお膳立てするまでが私たちの業務です。何千何万の人が関わる、大規模なプロジェクトです。
奥村 それを束ねて導くのが阿部さんということですね。実に大変ですが、非常にやりがいのあるお仕事だと思えます。今後はどのような目標をおもちなのですか。
阿部 地下鉄工事ではトンネルや駅舎、軌道といった土木・建築構造物をつくる要素と、車両を正確に運行するというシステムの要素があり、それらをすべて統括してマネジメントする「プロジェクトダイレクター」というポジションがあります。それを目指すのが、私の次のステップですね。さらにその先は、後進の育成にも取り組みたいと思います。

したのでしようか。
阿部 土木系をはじめ、建設会社は現場で活躍できるエンジニアを求めています。しかし、当時は今以上に「建設現場は男の職場」という風潮があったのです。
奥村 阿部さんが大学を卒業された1986年は男女雇用機会均等法が施行されたばかりで、まだ社会に浸透していなかったということですか。
阿部 そうですね。建設業界では特にそうだったと思います。そうした逆風を乗り越え、私の必死のアピールが実りました。職場でも、私が初の女性土木エンジニアでした。
奥村 会社ではどのような業務をされていたのですか。
阿部 やはり、デスクワークが中心でした。ところが、間の悪いことに、90年代前半のバブル経済崩壊によって、デスクワークができない女性の居場所は会社になくなってしまいました。このままでは先がないと思い、海外に目を向けて英語の勉強に取りかかったのです。海外で仕事ができる土木エンジニアは当時も少なく、そこに活躍の場を見いだしました。会社には留学制度があり、海外で勉強をするチャンスがあったのです。しかし、留学候補生に選ばれるための選抜試験を受けたところ、十分な点数が得られませんでした。やはり英語が足を引っ張ったのです。

ノルウエー留学を経て憧れの土木エンジニアへ

奥村 大学入試に続いて、ここでも英語の壁ですね。
阿部 はい。社内の留学制度を勝ち取るために、相応の留学先を確保することが必要条件として提示されました。つまり、高いステータスの大学に留学しなければならぬということでした。
奥村 なるほど。
阿部 相談に乗っていたいたのが、神戸大学大学院で世話になった櫻井春輔先生でした。「世界の俊英が集まるアメリカのアイビリーグ*4の大学院を目指しよ、自分に適したヨーロッパの名門校を探しなさい」とアドバイスをいただきました。そこで浮上したのがノルウエー工科大学です。同大学はトンネル工学に強い研究機関として知られており、大学院でこの分野を修めた私にとって研究を深めることができるメリットがあったのです。会社も、「ヨーロッパの名門大学なら」と納得してくれました。
奥村 留学先の候補が定まり、どのような取り組みをされたのですか。
阿部 ついに英語の克服に取りかかったのです。
奥村 はい。始業前と終業後に語学学

阿部 コミュニケーション能力ですね。英語の語学力ではありません。私は、いまだに英語自体は得意ではないといつもいでしょう。しかし、他者に伝えるコミュニケーション力は相対的に鍛えられました。海外では、日本のように指示を静かに聞いてくれるスタッフばかりではありません。インドでは、会議はむしろ騒々しいのが日常です。日本であればスタッフが大声で指示を受けるかもしれませんが、大声で指しを伝える「質問があればオフィスに来なさい」と言い残し、場を離れるといったスタイルがインドでは有効だったりします。「日本の習慣や思考」から離れて「いかに伝えるか」考えを巡らし、臨機応変に対応するのが真のグローバルコミュニケーションだと思っています。
奥村 阿部さんのお言葉に、とても重みを感じます。本日はありがとうございました。

*1 現在実施されている大学入試センター試験の前身。1977年から1989年まで実施されました。
 *2 1 本州、山口県下関市と九州（福岡県北九州市）を結ぶ長さ1,066メートルの海峡です。
 *3 1980年から1990年にかけて、付随して日本の資産価値も上昇しました。
 *4 4 アイビリーグ（Ivy League）とは、世界中から超一流の学生が集まるハーバード大学、イェール大学、プリンストン大学、スタンフォード大学、ブラウン大学、コーネル大学、ペンシルバニア大学といったアメリカの門8大学の総称です。